

画の悲み

国木田独歩

青空文庫

画えを好かぬ小供こどもは先まず少ないとしてその中うちにも自分は小供の時、何よりも画が好きであった。(と岡本某が語りだした)。

好きこそ物の上手じょうずとやらで、自分も他の学課の中画うちでは同級生の中自分に及ぶものがない。画と数学となら、憚はばかりながら誰たれでも来いなんて、自分も大おおに得意おおいがっていたのである。しかし得意ということとは多少競争を意味する。自分の画の好きなことは全く天性といっても可よかろう、自分を独ひとりで置けば画ばかり書いていたものだ。

独で画を書いているといえは至極温順おとなしく聞えるが、そのくせ自分ほど腕わんぱくもの白はく者は同級生の中うちにないばかりか、校長が持て余し

て数々退校を以て嚇おどしたのでも全校第一ということが分る。

全校第一腕白でも数学でも。しかるに天性好きな画では全校第一の名誉を志村しむらという少年に奪われていた。この少年は数学は勿もちろん論、その他の学力も全校生徒中、第二流以下であるが、画の天才に至っては全く並ぶものがないので、僅わずかに墨を摩あそうかとも言われる者は自分一人、その他は、悉く志村の天才を崇あめ奉たつているばかりであった。ところが自分は志村を崇拜しない、今に見ろという意気込ごみで頻しきりと励はげんでいた。

元来志村は自分よりか歳としも兄、級も一年上であつたが、自分は学力優等クラスというので自分のいる級と志村のいる級とを同時にやるべく校長から特別の処置をせられるので自然志村は自分の競争者

となつていた。

然るしかに全校の人氣、校長教員を始め何百の生徒の人氣は、温順おとなしい志村に傾いている、志村は色の白い柔和な、女にして見たいような少年、自分は美少年ではあつたが、乱暴な傲ごうまん慢な、喧嘩けんか好きの少年、おまけに何時いつも級の一番を占めていて、試験の時は必らず最優等の成績を得る処から教員は自分の高慢しゃくさわが癪しゃくに触り、生徒は自分の圧制が癪しゃくに触り、自分にはどうしても人氣が薄い。そこで衆人みんなの心持は、せめて画でなりと志村を第一として、岡本の鼻柱くたを挫くだいてやれというつもりであつた。自分はよくこの消息を解とけていた。そして心中ひそかに不平でならぬのは志村の画必ずしも能よく出来ていない時でも校長をはじめ衆人みんながこれを激賞し、

自分の画は確かに上出来であつても、さまで賞めてくれ手のないことである。少年ながらも自分は人気というものを悪んでいた。

或日学校で生徒の製作物の展覧会が開かれた。その出品は重に習字、図画、女子は仕立物等で、生徒の父兄姉妹は朝からぞろぞろと押かける。取りどりの評判。製作物を出した生徒は気が気でない、皆なそわそわして展覧室を出たり入ったりしている。自分もこの展覧会に出品するつもりで画紙一枚に大きく馬の頭を書いた。馬の顔を斜に見た処で、無論少年の手には余る画題であるのを、自分はこの一挙に由て是非志村に打勝うという意気込だから一生懸命、学校から宅に帰ると一室に籠つて書く、手本を本にして生意気にも実物の写生を試み、幸い自分の宅から一丁ばか

り離れた桑園くわばたけの中に借馬屋しゃくばやがあるので、幾度いくたびとなく其処そこの厩うまやに通つた。輪廓かよといい、陰影かげといい、運筆うんぴつといい、自分は確たしかにこれまで自分の書いたものは勿論、志村が書いたものの中うちでこれに比すべき出来はないと自信して、これならば必ず志村に勝つ、いかに不公平な教員や生徒でも、今度こそ自分の実力に圧倒さるるだろうと、大勝利を予期して出品した。

出品の製作は皆みんなな自宅みんで書くのだから、何なんびと人も誰が何を書くのか知らない、また互に秘密ひそにしていた。殊ことに志村と自分は互の画題を最も秘密にして知らさないようにしていた。であるから自分は馬を書きながらも志村は何を書いているかという問とを常に懐いだいていたのである。

さて展覧会の当日、恐らく全校数百の生徒中尤も胸を轟かして、
展覧室に入った者は自分であろう。図画室は既に生徒及び生徒の
父兄姉妹で充満いっぱいになっている。そして二枚の大画（今日のいわ
ゆる大作）が並べて掲げてある前は最も見物人が集つたかている。二
枚の大画は言わずとも志村の作と自分の作。

一見自分は先ず荒胆あらぎもを抜かれてしまった。志村の画題はコロ
ンブスの肖像ならんとは！ しかもチョークで書いてある。元来
学校では鉛筆画ばかりで、チョーク画は教えない。自分もチョー
クで画くなど思いもつかんことであるから、画の善悪よしあしはともか
く、先ずこの一事で自分は驚いてしまった。その上ならず、馬の
頭と髭髯しぜんめん面を被おおう堂々たるコロンブスの肖像とは、一見まるで比

べ者にならるのである。かつ鉛筆の色はどんなに巧みに書いても到底チヨークの色には及ばない。画題といい色彩といい、自分の要するに少年が書いた画、志村のは本物である。技術の巧拙は問う処でない、掲げて以て衆人の展覽に供すべき製作としては、いかに我慢強い自分も自分の方が佳いいとは言えなかつた。さなきだに志村崇拜の連中は、これを見て歓呼している。「馬も佳いがコロンブスは如何どうだ！」などという声があつちでもこつちでもする。自分は学校の門を走り出た。そして家うちには帰らず、直ぐ田甫たんぽへ出た。止めようと思つても涙が止まらない。口惜くやしいやら情けないやら、前後夢中で川の岸まで走つて、川原かわらの草の中に打倒ぶつたおれてしまった。

足をばたばたやって大声を上げて泣いて、それで飽き足らず起上つて其処そこらの石を拾い、四方八方に投げ付けていた。

こう暴あばれているうちにも自分は、彼奴きやつ何時いつの間にチヨーク画を習つたろう、何人だれが彼奴に教えたろうとそればかり思い続けた。

泣いたのと暴れたので幾干いくらか胸がすくと共に、次第に疲れて来たので、いつか其処そこに臥ねてしまい、自分は蒼々そうそうたる大空を見上げていると、川瀬の音が涼々そうそうとして聞える。若草なを薙いで来る風が、得ならぬ春の香かを送つて面かおを掠かすめる。佳いい心持になつて、自分は暫時しばらくじつとしていたが、突然、そうだ自分もチヨークで画えいて見よう、そうだという一念に打たれたので、そのまま飛び起き急いで宅うちに帰かえり、父ちちの許ゆるしを得て、直ぐチヨークを買い整ととのえ

画板^{がばん}を提^ひげ直^つぐまた外^{ひつぎ}に飛^とび出^でした。

この時まで自分はチョークを持つたことがない。どういふ風に書くものやら全然^{まるで}不案内であつたがチョークで書いた画を見たことは度々^{たびたび}あり、ただこれまで自分で書かないのは到底まだ自分どもの力に及ばぬものとあきらめていたからなので、志村があつた位い書けるなら自分も幾干^{いくち}か出来るだろうと思つたのである。

再び先の川^{かわ}辺^{べた}へ出た。そして先ず自分の思いついた画題は水^みずぐるま

車、この水車はその以前鉛筆で書いたことがあるので、チョークの手始めに今一度これを写生してやろうと、堤^{たど}を辿^{たど}つて上流の方へと、足を向けた。

水車は川^{かわ}向^{むこう}にあつてその古めかしい処、木立^{こだち}の繁^{しげ}みに半ば

被おほわれている案あんばい排ばい、蔦つた葛かずらが這はい纏まとうている具合、少年心こどもごころにも面白い画題と心得ていたのである。これを対岸から写すので、自分は堤おを下りて川原の草くさはら原はらに出ると、今まで川柳の蔭かげで見えなかつたが、一人の少年が草の中に坐つて頻しきりに水車を写生しているのを見つけた。自分と少年とは四、五十間隔けんたつていたが自分は一見して志村であることを知つた。彼は一心になつて自分の近ちかづいたのに気もつかぬらしかつた。

おやおや、彼奴きやつが来ている、どうして彼奴は自分の先へ先へと廻まわるだろう、忌いま忌いましい奴だと大に癩おおいしやくさわに触つたが、さりとして引返えすのはなお慊いやだし、如何どうしてくれようと、そのまま突立つたつて志村の方を見ていた。

彼は熱心に書いている。草の上に腰から上が出て、その立てた膝ひざに画板が寄掛よせかけてある、そして川柳の影うしろが後から彼の全身を被かい、ただその白い顔あたりの辺から肩先へかけて楊やなぎを洩もれた薄い光が穩まかに落ちてゐる。これは面白おもしろい、彼奴きやつを写してやろうと、自分はそのまそこま其処そこに腰を下して、志村その人の写生に取りかかった。それでも感心なことには、画板に向うと最早志村もいまましい奴など思う心は消えて書く方に全く心を奪とられてしまった。

彼は頭かしらを上げては水車を見、また画板に向う、そして折り折りりさも愉快らしい微笑ほほを頬ほに浮べていた。彼が微笑することに、自分も我知らず微笑せざるを得えなかつた。

そうする中うちに、志村は突然起たち上がって、その拍子うちに自分の方

を向いた、そして何にも言いがたき柔和な顔をして、にっこりと笑った。自分も思わず笑った。

「君^{きみ}は何を書いているのだ、」と聞くから、

「君を写生していたのだ。」

「僕は最早水車を書いてしまったよ。」

「そうか、僕はまだ出来ないのだ。」

「そうか、」と言って志村はそのまま再び腰を下ろし、もとの姿勢^{せいし}になつて、

「書き給え、僕はその間^まにこれを直すから。」

自分は画き初めたが、画いているうち、彼を忌ま忌ましいと思つた心は全く消えてしまい、かえつて彼が可愛くなつて来た。そ

のうちに書き終ったので、

「出来た、出来た！」と叫ぶと、志村は自分の傍そばに來り、

「おや君はチョークで書いたね。」

「初めてだから全然画まるにならん、君はチョーク画を誰に習った。」

「そら先せん達だ 東京から歸つて來た奥野さんに習った。しかも

だ習いたてだから何にも書けない。」

「コロンブスは佳よく出来ていたね、僕は驚いちやツた。」

それから二人は連立つれだつて学校へ行つた。この以後自分と志村は

全く仲が善よくなり、自分は心から志村の天才に服し、志村もまた

元來が温順おとなしい少年であるから、自分をまたなき朋ほう友ゆうとして親

しんでくれた。二人で画板を携え野山を写生して歩いたことも幾

度か知れない。

間もなく自分も志村も中学校に入ることとなり、故郷の村落を離れて、県の中央なる某町に寄留することとなつた。中学に入つても二人は画を書くことを何よりの樂たのしみにして、以前と同じく相伴うて写生に出掛けていた。

この某町から我村落まで七里、もし車道をゆけば十三里の大おおま迂廻わりになるので我々は中学校の寄宿舎から村落に帰る時、決して車に乗らず、夏と冬の定期休業ごとに必ず、この七里の途みちを草鞋らじがけで歩いたものである。

七里の途はただ山ばかり、坂あり、谷あり、溪けい流りゅうあり、淵ふちあり、滝あり、村落あり、児童あり、林あり、森あり、寄宿舎の

門を朝早く出て日の暮に家に着くまでの間、自分はこれらの形、色、光、趣きを如何どういう風に画いたら、自分の心を夢のように鎖とぎしている謎なぞを解くことが出来るかと、それのみに心を奪とられて歩いた。志村も同じ心、後あとになり先になり、二人で歩いていると、時々路傍に腰を下ろして鉛筆の写生を試み、彼が起たたずば我も起たたず、我筆をやめずんば彼もやめないという風で、思わず時が経たち、驚ろいて二人とも、次の一里を駆かけ足あしで飛んだこともあつた。

爾来じらいすねん数年、志村は故ゆえありて中学校を退いて村落に帰り、自分は国を去つて東京に遊学することとなり、いつしか二人の間には音信もなくなつて、忽たちまちまた四、五年経つてしまった。東京に出て

から、自分は画を思いつつも画を自ら書かなくなり、ただ都会の大家の名作を見て、わずか僅に自分の画えどころ心を満足させていたのである。ところが自分の二十の時であった、久しぶりで故郷の村落に帰った。宅の物置にかつて自分が持もちあるいた画板があつたのを見つ、同時に志村のことを思いだしたので、早速人に聞いて見ると、驚くまいことか、彼は十七の歳とし病死したとのことである。

自分は久しぶりで画板と鉛筆を提ひっさげて家を出た。故郷の風景はもと旧の通りである、しかし自分は最早以前の少年ではない、自分はただ幾いくつ歳かの年を増ましたばかりでなく、幸か不幸か、人生の問題になやまされ、生死の問題に深入りし、等しく自然に対しても以前の心には全く趣を変えていたのである。言いがたき暗愁は暫しばら

時くも自分を安めない。

時は夏の最中もなか自分はただ画板を提げたというばかり、何を書いて見る気にもならん、独りひとぶらぶらと野末に出た。かつて志村と共に能く写生に出た野末に。

闇やみにも歓よろこびあり、光かなしみにも悲あり、麦藁帽むぎわらぼうの廂ひさしを傾けて、彼方かなたの丘こなた、此方の林を望めば、まじまじと照る日に輝いて眩まばゆきばかりの景色。自分は思わず泣いた。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学名作集（上）」桑原三郎・千葉俊二編、岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

底本の親本：「国木田独歩全集 2」学習研究社

1964（昭和39）年7月1日初版発行

初出：「青年界」第一卷第二号

1902（明治35）年8月1日発行

入力：鈴木厚司

校正：mayu

2001年5月28日公開

2004年7月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

画の悲み

国木田独歩

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>